

いつもそばにいるから

きず悩んでいませんか
ではありません
のサポーターがいます

私たちは主に要介護1から5の人たちのお世話をさせていただいています。その中でも認知症に関する相談を受けることがよくあります。そのような相談を聞く中で、家庭の状況や本人の症状など場合によりますが、家族だけで支えていくのは非常に困難であ

家庭だけで支えるのは困難 支援のネットワークづくりが必要

る場合が多いと感じています。福祉サービスをうまく利用していただくことで、介護者の人が落ちついたり、本人も調子が良くなったり認知症の症状が軽減されたりした事例があります。例えば▼ヘルパーと料理を作っていてその人本来の明るさや活気を取り戻し



鬼北町社会福祉協議会
ケアマネージャー管理者
善家 正道さん

た▼家族から助言を受けるよりもヘルパーが言う方が聞き入れやすいなどです。またデイサービスに関しては、集団で生活することが刺激になり▼介護者に対する依存が少なくなつた▼認知症の症状が落ち着いたという報告も受けています。福祉サービスをうまく利用していただけると、介護者の負担を大幅に軽減できるだけでなく、認知症の人にも良い影響を与えることができます。ぜひ相談してください。

また、私たちは、民生委員さんなどできるだけ情報を共有して必要があれば訪問してもらつたり、介護タクシーなどの社会資源を紹介したりするなど、住みやすい環境を整えることにも力を入れています。

しかし、このような介護サービスや社会資源の活用だけでなく、近隣の住民、民生委員さん、郵便局の職員さん、お店の店員さん、かかりつけの先生や行政、あらゆる人たちが一緒に認知症の人を見守るというネットワークづくりも安心して暮らせるまちづくりに大切なことだと思えます。

知識を身に付け意識を変える

認知症は、高齢化が急速に進む現代では、背を向けられない問題です。また発症した本人や家族だけの問題でもありません。しかし本当の「問題」は、認知症に対する理解度や関心の低さなのです。誰もが発症の可能性を持つっており、誰もがそれについての理解を深める必要があるのです。

認知症になると何も分からなくなる。これは間違いないです。認知症の人にも「こころ」があります。自分の状態の変化に焦り、周囲の心ない言動に怒り、今おかれている状況が理解できず困惑し、生活のペースがつかめず混乱し。常に不安を抱えているのです。

またそれは介護者(家族)も同じです。介護者は4つの段階を経験すると言われています。▼とまどい・否定▼混乱・怒り・拒絶▼割り切り▼受容。本人はもちろん、受容に至るまでの家族の苦しみや負担も図り知れません。このような現状を、周囲の人は他人事のように見ているだけでよいのでしょうか。